

和本の虫とたたかう

橋口 侯之介（誠心堂書店）

S 虫が飛んでいる

憂鬱な季節がやってきた。梅雨である。しかし、その陰鬱で湿潤な天候を嫌っているわけではない。この時期、もっといやなことがある。和本の虫が成虫になる季節なのである。

仕事をしていると目の前を小さな虫がスーッと横切るように飛んでいることがある。おやつと思ったときは、もうどこにも見えない。これが飛蚊症というやつかと一瞬落ち込む。しかし、若い人もたしかにときどき飛んでいるのが見えるというので安心する。いや、安心してはいけない。これが和紙を好物とするシバンムシだ。秋から冬の間、和本の中で紙をたらふく食べたあと、初夏のいい季節になると、親虫になって本の中にあけた穴を通して外に飛び出す。せいぜい二ミリくらいの黒褐色をした小さな虫で、外にいる異性を求めて飛び立つのだ。それが、わたしの目の前を音も立てずに直線的に横切った。

人を刺したりもしない。いたって平和的で穏やかな虫である。だから、和紙を食い荒らすようなことをしなければ、気にもとめずに飛ばしてあ

げるのだが、そうはいかない。文化遺産の敵である。思い切って両手でパチッと打つのだが、まず捕まらない。いつのまにか、どこかへ消えてしまう。

これが一匹、目の前を飛んだということは、どこかの本の中から何匹もの成虫が飛び出したことを示している。殺虫剤を部屋中に噴霧すれば、とりあえず周辺にいる虫は駆除できるだろう。しかし、どこから飛び出したのかを特定しないと根本的な解決にならない。

博物館や文書館などの施設は、それ相応の対策が立てられ、その防止から駆除方法まで研究が進んでいる。文化財虫害研究所という機関があつて『文化財の虫菌害と防除の基礎知識』などのテキストも出している。

しかし、これを読んでわたしたちのような零細な本屋や、個人の愛書家の人たちの役に立つかというと、失礼ながら答えはノーだ。

空調で管理された収蔵庫ならたしかに防除できるだろう。ただし、それでは本を日常に使うことができない。本棚があつて、いつでも必要な本を取り出して調べられるのが、個人が考えている書物と人の関係だ。特別の許可がないと入れない収蔵庫では、本を長期保存するには適しているが、利用者の便を犠牲にしている。

文化財クラスの一級品は、人の汗や吐く息ですら劣化の原因になるので、手袋にマスクをし、何なら防塵服を着用した場合のみ閲覧が許可される、というほど厳しく制限をしてもいいだろう。これまで千年もつた物が、これからの千年を維持できないとなると「文明」の恥だからだ。

この研究所のホームページを見ると、一時、有害なガス(臭化メチルなど)を大気中にばらまき、発がん性やオゾン層を破壊するといった使用をやめていた燻蒸が最近また復活してきたらしい。人への曝露防止と代替薬品によるのだろう。そういう作業をするために防除作業主任者の資格というのがあって、そのためのテキストも販売している。

また研究所では「文化財の近くに置くだけで、希薄なマイクロン単位の有効成分のガスが狭いところまで行きわたり、長期間防虫効果があります」といって。有機リン系殺虫・防虫成分であるジクロロボス入のプレートや、「ピレスロイド系殺虫・防虫剤プロフルトリンで、物陰に潜む害虫を追い出す強い作用が特徴」のプレートというものを売り出している。特別の収蔵施設がある機関では、たしかに効果は大いにあるのだろう。

しかし、B級以下の書物までこうしますか？ 一般家庭や店舗の本棚で、ジクロロボスなどの強力な殺虫剤を使用しますか？

少量ならいいけれど、わたしは、あなたの健康のためにお奨めしない。では、どうすればいいのだろうか。とにかく、敵を知ることである。

そのうえで対策を考えよう。

§シバンムシの生態

シバンムシの中でとくに和紙を好むのがフルホンシバンムシという種類で、似たような種類としてザウテルシバンムシとかケブカシバンムシというのもいる。東日本ではフルホンシバンムシが、西日本では少し大きいザ

ウテルシバンムシが多いとされている。虫害による穴は西日本のほうがやや大きいことを経験的に感じている。

カブトムシの親戚なのだが、こんな虫を専門に研究する生物学者は少ないとみえて、どうもまだはつきりしないことが多い。数十種類の辞典類を蔵する最近の電子辞書を見ただけでも(もっともシバンムシを項目として取り上げているのはせいぜい四種類程度だが、辞書の数だけ説が違う)。

世界中にはシバンムシ科に属する虫は二千種以上いるそうだが、辞書によつてその数も、千種ともいうし二千種ともいう。そのうち日本にいるのは辞書によつて十八種というのから五十種というのまでである。これは、実は今でも新種がどんどん発見されるかららしい。森の中の枯葉を食べるような種類が多いのだ。

よく漢字で「死番虫」などと書くが、これは英名の *deathwatch* に由来する。つまり「死の見張り番」ということらしい。それが大方の説だが、はたしてそうなのか心もとない。なぜなら、ある辞書は英名を「死の時計」と訳し「誤つて死番と書いたのだ」とまことしやかに説明するものもある『大辞泉』。これは誤解で、*watch* を時計と訳するからいけないので、見張りとして訳せばよかつたのだ。船の見張り番をワッチという。死の番をする、つまり通夜の晩の不寝番である。

ただし、そこからまたまことしやかな説が流れる。英語の辞書をいくつか見ると、*deathwatch beetle* のことを、ある辞書は「この虫の交尾信号の音が不吉に聞こえたことから」名づけられたといい、別の辞書は「木を

食って穴をあける際に発するチクチクという音が死の予告であると信じられた」とある。まことにおどろおどろしいが、時計の音に引きずられた説だと思う。日本にいるフルホンシバンムシは全く音を立てないので(わたしは聞いたことがない)、そういう説に惑わされる必要はない。

いずれも電子辞書でわかるのはそこまでで、木や紙を食べるのは成虫でなく幼虫であることを書いているのは一つもなかった。交尾のさいに音をたてるといふならそれは成虫だろうし、チクチクとかコツコツと音をたてて食い進むのは、幼虫のはずである。

わたしが見た限りでは、日本家屋害虫学会編『家屋害虫』(昭和五十九年、井上書匠がもつともよく説明をしており、今日のところはそれを参照し、わたしの経験を加えて生態を知っておこうと思う。

いま目の前を横切っていたのはその成虫だが、問題は幼虫だ。交尾したあとメスの成虫がまた本にやってきて卵を産む。卵からかえると乳白色をした蛆虫になる。それからさなぎの時期を経てまた成虫になる。つまり、成虫↓卵↓蛆虫↓さなぎ↓成虫というサイクルを繰り返すのだ。

卵からかえる日数がどのくらいなのかということも文献では確認できなかった。タバコシバンムシという種類はひと夏に二、三回このサイクルを繰り返すというが、フルホンシバンムシは年に一回のはずである。

夏頃に生まれた卵は一、二週間後この時期はわたしの経験から割り出したに体長が約二、三ミリ(大きくなると四、五ミリのとくもある)の蛆虫になる。これが和紙を食いつくす。洋紙は苦手と見えて、もっぱら和紙、それも楮の紙

が好物である。さらに糊のついた紙をもつとも好む。だから、和本を帙に入れるのは問題なのだ。みかけはよくなるし、洋本といっしょの本棚にも入れやすい、物理的な保護には役立つなど利点もあるが、これは糊をたくさん使う。わたしの経験では、帙入の本に虫がつきやすい。成虫が飛んでいるとき、どの本が怪しいか調べるのだが、まず帙入の本から始めるようにしている。たいてい、それで当る。

幼虫は食欲旺盛で、半年以上かけて本にトンネルを掘って食べ進んでいく。その糞が黒っぽい粒状をしていて、本からこぼれ落ちる。机の上がザラザラになるのですぐわかる。虫害が進んでいるかどうかは、これで判断する。

春先になると、この穴の中で蛹まごころとなる。このとき糞やかじり屑を唾液で固めて蛹室をつくるため紙がくっついて開きにくくなる。そうして一定の時期が来るとこの期間も文献ではわからなかった、飛びたっていくわけだ。成虫は、明るいところが好きで、窓辺や照明器具に集まろうとする。そこで雌雄が邂逅するのだろう。そして幼虫でいたときと同じ場所に産卵する傾向がある。蛙のような習性である。だから、一度食われた本は、ちゃんと措置をしておかないと、再び虫の餌食になる危険性があるのだ。

§ 虫退治

不幸にして今も虫害が進行中のときは、幼虫を見つけ出して殺すしかない。本の綴じ代の中に入り込んでいるのを見つけるのは骨だが、辛抱強く

たたき出す。わたしの店では女性陣がこの作業を得意としており、はじめは気味悪がっていたが、辛抱強くやってくれる。見つけたらこの方法が一番効果的である。

「文化財保存修復学会誌」（四十号など）によれば、環境に害のない生物劣化防除法として、密閉した袋の中に書物と脱酸素剤を入れて、およそ二週間経過させると内部の虫を殺すことができるというのがある。そこでさっそくわたしの店でもこの方法を試してみた。布団や衣類を真空にパックする袋を購入して、そこに和本を入れ、市販の脱酸素剤を入れて掃除機で中の空気を吸い込むと、パリパリに固くなる。酸素はおろか空気もない状態にして三週間放置しておいた。その後空気を入れると、本は元に戻って安心したが、内部の幼虫も生きたまま出てきてがっかり。結局、手作業で虫をたたき出したが、効果は認められたいえなかった。ある大学の紀要に載ったこの方法での実験では「100%効果が得られた」とあるが、たぶん、わたしのやり方が悪かったのだろう。ただ、だれが実行しても成果がなければ意味がない。

拙著『和本入門』では、中野三敏先生の例にならって和本をラップで包んで電子レンジで殺虫する方法も紹介したが、いまひとつ自信がない。たしかに虫はいなくなるが、本を傷める危険がつきまとう。

初夏から梅雨明けの時期、虫が飛んでいたら要注意。この成虫をみつけ出すフェロモン・トラップという化学剤も市販されているが、それよりも人の感覚で十分だ。飛蚊症などと思わずに、目の前を飛んだと思ったら、

その周囲の和本を調べる。そこで怪しい本を見つけ出して、虫がいたらたたき出す。この手作業が一番確実だ。

梅雨明けから盛夏の間、よく晴れた日の昼間に外の日陰に本を広げる虫干しの方法は予防として効果がある。すべての本にこれをするのは大変だが、そういう普段の心がけが大事だろう。結局、こまめに手作業するのがわれわれ一般人の虫退治法というわけだ、

なお、やつても無駄というか、一利もないのが、本の防虫、殺虫の目的での家庭用の燻煙殺虫剤の使用だ。ゴキブリやダニに悩まされているのならご自由に使っつけてっこうだが、本の奥深くにいるシバンムシの幼虫まで届く効果はないと思う。

日本人は本を大事にしてきたので、よく古い書物の残る国柄である。湿気が強いので、しみ・かびなどの害もあるが、もともと和紙は日本の気候条件に適応した良い素材だ。だから、もし、このフルホンシバンムシがいなければ、もつと本は残っていただろう。

わたしの夢は、記紀より古い歴史書や風土記の全文、源氏物語の紫式部自筆稿本、伊勢物語の作者がわかる古写本などを実際に触ってみることだ。かなわぬこととはいえ古本屋を始めた以上、いつかはそんな出会いがもしかするとあるかもしれないという夢を見る。虫害がなければ、日本人のことだ、きつと残っていてくれたに違いない。

フルホンシバンムシのことは、まだわからないことが多い。人間への害がなく、一般人が容易に実行できる駆除方法を編み出してほしいものだ。